

# 現代中国の地方演劇における新編歴史劇

——「朱元璋斬婿」の展開から——

川 浩二

## 1. はじめに

本論の目的は、中国における伝統的な地方演劇（地方劇）の作品のうち、現代に作られた演目、とくに「新編歴史劇」と呼ばれる作品群を検討対象とし、とくに「朱元璋斬婿」の物語を持つ演目について取り上げ、その文化的文脈を明らかにすることにある。

現代中国における小説や戯曲の中には、他国のいわゆる「現代文学」・「現代演劇」と接続し関連しながら制作されている作品も数多い。とはいえ、とくに中国の演劇を取り上げるさいには、いまだに地方劇を外してしまうわけにはいかない。北京や上海といった大都市の中心部はともかく、中国の地方都市における劇場は、基本的には地方劇を上演するために存在しており、観劇という行為はすなわち地方劇を鑑賞することを指しているといえるためである。

中国の地方劇はそのほとんどが歌劇である。その歌詞の発音は各地方の方言音で、セリフにも方言が使われる。そのため、方言を共有する地域が、ある地方劇の広がる地域と重なることになる。しかし一方で歌詞じたいは伝統的な書き言葉、いわゆる文言で書かれているために、文字の上では中国語圏全体で理解する。また歌われるさいの音楽も作詞法も、かなり広い地方と多くの劇の種類に共通する部分があり、別の地方劇から演目を移植して演じることも伝統的に行われてきた。

前近代では、それぞれの地方劇どうしは同地域内での別の劇種や隣接した地域との交流を中心としており、またさまざまな劇種があつまる都市における接触が、ある物語の演目を別の劇種に伝えていたと考えられる。対して現代では、とくに新中国期以降には全国の劇種を集めて上演する催しが政府によって開かれ、すぐれた演目や劇作家、俳優に賞を与えるなどの格付けが行われることで、演目の別の劇種への移植をうながしてきた。また評判のよい演目は出版により広められ、映像として伝えられるものも多い。それらの動きは、直接的、間接的の差は

あれ、各級政府の文化部門によってコントロールされているといえる。

本論の中心的な検討対象である新編歴史劇の『朱元璋斬婿』は、1979年に河北梆子と呼ばれる河北省の地方劇のために作られ、1980年代に多くの地方劇に展開し、その後も演じられる場所を増やしている。それと並行して現在までに「明の太祖朱元璋が法に照らして身内である娘婿を処刑した」という物語がさまざまなメディアで繰り返し取り上げられるようになっていく。本論では、この「朱元璋斬婿」の物語の展開から、現代の中国における地方劇の演目の制作と、歴史人物の逸話がよく知られる話柄として定着するまでの過程を明らかにし、その文化的な文脈がどのようなものであるかを位置づけたい。

## 2. 「新編歴史劇」について

新編歴史劇とは、おもに新中国成立以降に、「マルクス主義の歴史観に基づき、人民大衆の視点で歴史を語り、人民大衆を教育すること」を目的として作られた新作の歴史劇をいい、革命歴史劇、現代劇とともに、中華人民共和国建国以来の新作の地方劇の作品の「三本の脚」と呼ばれるもののうちのひとつとされてきた。

1958年から1963年にかけて出版された『中国地方戯曲集成』は、中国の各地方における伝統演劇の演目を集めたものである<sup>(1)</sup>。そのうち中華人民共和国建国以降の作品には、「建国以来創作された革命歴史劇」、「当時の社会現実を反映する現代劇」といわゆる「新編歴史劇」が含まれる。収録された演目は例えば揚劇『碧血揚州』、『百歳掛帥』、京劇『打乾隆』、『血染長平』、『将相和』、『獅虎記』、『黒旋風李逵』などであった。これらを1950年代までの「新編歴史劇」の代表とみなすことができよう。

地方劇における新編歴史劇の代表的な作品の中には、非常によく知られ、すでに戯曲にもなっている物語が改めて新作として作られたものも多い。たとえば『百歳掛帥』は京劇『楊門女将』の先行作品とみなせ、いわゆる楊家将物語の「十二寡婦征西」を題材にしているし、『獅虎記』、『黒旋風李逵』はいずれも『水滸伝』に材を取っている。『将相和』は劇作家翁偶虹（1908-1994）の代表作の一つであり、戦国趙の廉頗と藺相如が「刎頸の交わり」を結ぶ有名な物語を演ずるものである。

その後、文化大革命の時期には新作が作られることが無くなるが、そもそも文化大革命そのものが、歴史学者であった呉晗（1909-1969）が1961年に発表した新編歴史劇『海瑞罷官』に対する批判から始まったことはよく知られている。

海瑞は明の嘉靖帝に諫言したことから、清廉潔白な官僚「清官」としての声価が高かった。そのため物語文学にも取り上げられ、清代には京劇『海瑞上訴』や

小説『海公案』が作られていた。『海瑞罷官』は、海瑞が時の権臣徐階を批判してその子徐璠、徐琨を罰して軍籍に送り、弟の徐陟を捕らえたものの、徐階の意を受けた戴鳳翔の弾劾を受けて罷免される、という史上の事件に材を取ったものである。戯曲としては、徐階の息子徐瑛の横暴を知った海瑞が、法に照らして徐瑛を捕らえ、徐階は配下の戴鳳翔を遣わして海瑞に罷免が決まったことを告げるが、海瑞は最後の仕事として徐瑛の処刑を命令する、というものになっている。

呉晗は明・清の社会経済史を中心に広い時代と分野に渡り精力的に研究活動が続けた学者であり、1965年当時、北京市副市長・中国民主同盟副主席の重職にあった。しかし1965年11月に姚文元（1931-2005）が「新編歴史劇『海瑞罷官』を評す」と題する文章を発表し、それをきっかけに大きな批判が起こった。この事件から姚文元は自らの地位を高め、そのために後に「四人組」の一人として糾弾されることになるが、ここではそれについては措く。

文化大革命後、1970年代末から1980年代にかけては再び新編歴史劇が作られるようになるとともに、劇作家たちの新編歴史劇に対する論考が目立つようになった。

みずからも話劇『李白』や京劇『司馬遷』などの作者である郭啓宏（1940-）は、新編歴史劇についての論考を数度にわたって書いている。その「新編歴史劇の思考」には、次のような一段がある。

新編歴史劇という概念は従来さまざまに異なる解釈をされており、その内包と外延にも変化があったが、我々は学術的な角度によって探求するほかない。私としては、この概念の核心は「新編」の二字にあるとしたい。すなわち新しい観念によって古い題材を扱い、まったく新たにマルクス主義の立場と視点と方法とをもって歴史を認識し、歴史唯物主義の尺度をもって歴史人物を評価するのである。これをおいて他に「新編」を論ずることはできない。古い観念で歴史的題材を二次的に処理した作品は、「新編」と無縁のものだ<sup>(2)</sup>。

また新編歴史劇の越劇『胭脂』、紹劇『于謙』などの作者である銭法成（1932-）は、みずからの劇作について、「新編歴史劇と歴史物語劇の創作を語る」と題された論考において以下のように述べている。ここでいう歴史劇とは史上の事件を題材にした劇であり、歴史物語劇とは特定の時代を舞台とした創作の物語を持つ劇のことである。この分類もかつて呉晗が提出したものであった。

私が考えるところでは、マルクス主義の観点を用いて創作された歴史劇と歴史物語劇は、社会主義演劇における重要な部分を占めるものである。それら

は人々の歴史知識を増やし、人々の経験と知恵を豊かにし、人々の民族への誇りと愛国主義の精神を育てるものである。「古を以て鑑と為す」ということは、もとより人類の進歩の作用を起こすものである。しかしよい歴史劇と歴史物語劇を作るのは容易ではない。作者が豊富な歴史知識と進歩的な歴史観を持ち合わせ、歴史資料に対しても慎重な処理をしなければならない。(略) もちろん、歴史劇を書くさいには史実に拘泥することはできない。そのようにしては芝居にならないから、虚構は必要である。しかし、また歴史の発展に可能な範囲を超えてはならない。歴史の上で起こりうること、古人が持ちうる思想、行動と言語を書かなければならない。これらの点については現代化してはならず、現代人の思想によって古人を強めてしまてはいけない<sup>(3)</sup>。

後半部分の論点については、浙江の劇作家沈祖安（1927-）も「歴史劇に対する何点かの質疑」と題した論考に、「封建時代の潔白な官僚や義気に富んだ民衆に、今日の共産党員を教育させ、封建による統治を行っていた古人に、今日の社会主義制度の欠点を指摘させるというのは、滑稽さを免れない」と述べる<sup>(4)</sup>。

これらの論考において特徴的なのは、新編歴史劇についての論点が、とくに題材の事件の歴史資料と歴史人物をいかに扱うかに集中していることであろう。これは1950年代以来、よく知られた人物と歴史事件を取り上げながら、どのように新編歴史劇として作り上げるか、という試みが何度もなされてきたことをふまえているといえる。おそらく実際の劇作にあたっては、作家たちは歌を中心とする場面作り、劇の最高潮の作り方についてもっとも苦心していると思われる。しかし「新編歴史劇」そのものを論じた論考の中では、ある程度劇の筋立てにふみこむことはあっても、地方劇において本来もっとも重要な要素である、登場人物による歌唱とその歌詞についての検討が議論の中心になっていない。それについては、個別の演目がどのように作られ、評されているのかを具体的に見ていく必要がある。

### 3. 明の太祖朱元璋と「朱元璋斬婿」の典拠

『朱元璋斬婿』は、明の太祖朱元璋が登場することから、明朝開国の物語の一部としてとらえることができる。しかし、たとえば先にあげた京劇『将相和』や『海瑞罷官』のように、前近代にすでに同じ題材の戯曲や小説があるうえで、改めて歴史資料との関連を考えることによってできた作品ではない。歴史書においても、また通俗物語においても、「朱元璋斬婿」の話柄はよく知られていたとは

いえないからである。

明朝開国の通俗物語が文字に残されるようになるのは、おもに明代後期に歴史小説『皇明英烈伝』が出版されて以降ということになる。明代後期には『三国志演義』をはじめとする歴史小説の作品はすでに制作され刊行されており、『皇明英烈伝』もそれらに倣って作られたものとはいえ、三国時代をはじめとする他の歴史物語、とくに周・漢・唐・宋といった王朝の開基の物語と異なるのは、まさに明という王朝のもとで、歴史書と歴史文芸が同時に作られ出版されていったという状況である。

清代になってからも、いわゆる「明英烈」の物語として、文芸も地方劇や語り物の演目も一定数存在し、歴代の王朝の物語と並んで伝えられてきた。しかし、これらに「朱元璋斬婿」の物語は含まれていない。

現代では、「明英烈」の物語に由来する伝統的な演目に並んで『朱元璋斬婿』が演じられているが、『朱元璋斬婿』は登場人物から見ても、筋立てから見ても、伝統的な物語との接続は意識されていない独立した演目であるといえる。

『明史』巻121には、『朱元璋斬婿』の典拠となる短い記述がある。

安慶公主は、寧国公主の同腹の妹であった。洪武14年（1381）に欧陽倫に嫁いだ。欧陽倫はひどく無法な男であった。洪武年間末、茶の無許可での国外への持ち出しがまさに厳しくなっていたおり、たびたび使用人を遣わして茶を国外に持ち出して売っており、至るところで騒動になっていたが、高位の役人でも罪に問おうとはしなかった。召使いの周保というものがことさら横暴であり、当地の役人を呼びつけ民に対して車数十台ぶんもの茶を要求した。河橋巡検司（橋の通行にあたって荷をあらためる役所）を通過するとき、巡検の役人を打ち据えて辱めた。役人は堪えられず、上奏した。洪武帝は激怒し、欧陽倫を死罪とし、周保らもみな誅した<sup>(5)</sup>。

この事件については、『太祖実録』洪武30年6月の条にも記されているが、特に目立つようなものではない。『明史紀事本末』など明代の大事を記した書物にも取り上げられてはいない。『皇明通紀』や『明通鑑』など編年体の史書には明記されるものの、やはり注目を集めるに足る事件というわけではなかった。

この話柄が知られるようになったのは、先述の歴史学者である呉晗の著作によるところが大きいと考えられる。呉晗は1950年代までの明史研究、とくに朱元璋の研究をリードしており、その著作『歴史の鏡』（1946年）と『朱元璋伝』（1948年）の両方でこの事件を取り上げている。とくに『歴史の鏡』では、王朝時代の皇帝が中央集権の頂点にあり、いかなるふるまいも許されていると思われるがちな

のに対して、この事件を例の一つとして、君主にはつねに法律に従うことが必要とされていたと述べている。

『歴史の鏡』『歴史上の君権の制限』（部分）

また、たとえば明の太祖朱元璋の時代には、「およそ個人で取引する茶葉が国境を越えるさい、関所の検査を受けなければすべて死罪とする」と定められており、駙馬（原注：皇帝の娘婿）である都尉の欧陽倫は私茶を販売した罪でこの法律に従って死罪とされた（原注：欧陽倫の妻の安慶公主は皇后である馬氏の実子であった）。これに類する伝統的な守法の精神は、歴代君主の個性と教養の違いによって、あるいは自覚的であり、あるいは受動的であったが、すべて守法は君主たるものが備えるべき道德意識であると考えられていた。君主がもし法を守らなければ、政治はただちに常軌を逸し、臣下は基準とするとところを失くし、亡国の禍がほどなく訪れることになる<sup>(6)</sup>。

明代の陳建『皇明通紀』巻8のこの事件の後には著者陳建の按語として「国初の法律が執行される嚴格さは、貴人の一族や皇帝じしんの親戚といえども斟酌しなかったこと、かくのごとしである」とあり、呉晗はこのような見解をさらに推し進めているといえるだろう。

1969年に呉晗が獄死してから十年、1979年に追悼公演として『海瑞罷官』が再演された。この時期になって呉晗の正式な名誉回復が行われたのである。文化大革命後の朱元璋研究をリードした陳梧桐は、呉晗の『朱元璋伝』を再評価し、1979年10月16日『光明日報』に発表された「朱元璋の地方官の行政を引き締める措置を評す」という文章において、『朱元璋斬婿』のもとになる欧陽倫の処刑に至る事件にふれている<sup>(7)</sup>。

これを契機に、さまざまな学者の著作でこの事件が取り上げられるようになっていった。李德運『中国執法故事』（1981年）、姬樹明、俞鳳斌『朱元璋故事』（1981年）などの単行本にも、黄傑「朱元璋の歴史地位の再評価」『広西師範大学学报（哲学社会科学版）』1980年第3期、徐成均「わずかな罪にも厳罰をもって処す 呉晗の『朱元璋伝』の断片を読んでの啓示」『法学雑誌』1982年第5期などの雑誌記事にも「朱元璋斬婿」の記事が見える。とくに徐成均の記事は直接、呉晗の『朱元璋伝』の中に見える記事として『朱元璋斬婿』の話柄を取り上げている。

『朱元璋斬婿』のもととなる朱元璋が娘婿を処断したという話柄は、呉晗の著作によって1940年代からすでに知られる素地があったと考えられるが、1970年代末に文化大革命が終結した後に、特にさまざまな言説に取り上げられるように

なっていた。

河北梆子『朱元璋斬婿』が1979年に作られるに当たっては、その当時、文化大革命中の呉晗が置かれたような「守法」の精神を無視した行為が数多く行われた状況に対する批判と反省が多く表れるとともに、典拠となる話柄が論文、書籍に取り上げられる機会が多くなっていたことが背景にあったといえよう。

#### 4. 河北梆子『朱元璋斬婿』

1979年は中国の地方劇にとっては革命模範劇のみを演じざるをえなかった文革期から、劇団が保持してきた伝統演目に加えて、新作の演目も演じることができるようになった時期に当たる。河北梆子『朱元璋斬婿』の作者許鳳錦は当時の創作から上演への状況を自ら記している。

この劇は1979年に創作され、許鳳錦脚本、李宗華等監督、廊坊地区河北梆子劇団により初演された。河北省戲劇匯演に参加し、1983年3月に脚本賞、上演賞を獲得した。河北省テレビ局において録画され、前後して9省のテレビ局および中央テレビ局により放映された。脚本は『河北戲劇』1982年第9期（筆者注：じっさいには1981年第11期に収録）に発表された。後に北京海淀評劇団により移植されて上演され、北京テレビ局により録画放映された。1984年5月、山西省北路梆子劇院により移植され、山西テレビ局によってテレビ芸術番組として録画された。この劇は1982年『中国文芸年鑑』にも収録されている<sup>(8)</sup>。

ここには書かれていないが、『朱元璋斬婿』は『斬駙馬』の題名で1981年に単行本として限定出版され<sup>(9)</sup>、その後上記の通り雑誌『河北戲劇』に収録されている<sup>(10)</sup>。

北京海淀評劇団の上演にさいしては、油印本で刊行された『新編歴史劇 斬駙馬』（1981年）があり<sup>(11)</sup>、上演のさいの写真を用いて連環画（連続絵物語）が制作され、『朱元璋斬婿』（1983年、農村読物出版社）として出版されている（図1）<sup>(12)</sup>。また1982年に長春市京劇団の名で『朱元璋斬駙馬』が出版されているが、脚本家の名としては「許鳳錦」のままになっており、歌詞もそのまま使われている<sup>(13)</sup>。またこの劇は許鳳錦脚本、李盛監督の体制で上演されたことが確認できる<sup>(14)</sup>。

北方中国において『朱元璋斬婿』が広まっていくさいには、1980年代の早い段階で、陝西省を中心に北方中国に広がる主要な劇種の一つである秦腔に移植されたことも力を貸している。西安五一劇団の馬桂英（1943-）は女性の「生」（男性



1 明朝洪武年间，开国元君朱元璋，登了皇位。为了巩固统治，维护社会安全，他特地颁布了大明法典。

図1 連環画（連続絵物語）『朱元璋斬婿』（1983年、農村読物出版社）

の主役を演ずる役柄）で、秦腔全本『朱元璋斬婿』を自ら演出した。その後、おそらくは1980年代から1990年代にかけて演目が各地の地方劇に移植されたと考えられる。

現在確認できるところでは、河北梆子『朱元璋斬婿』と同じ系統にある作品を演じていることが確認できる劇種は以下の通りである。ふつう『朱元璋斬婿』もしくは『斬駙馬』の題で行われており、別題が有名な場合にはそれを付した。

豫劇（別題『明君朱元璋』・『大明驚雷』・『金殿風雲』）（河北・河南・山西・陝西）晋劇（河北・山西・陝西）蒲劇（山西・陝西）評劇（河北・陝西）河北梆子（河北・河南）越調（河南・陝西）秦腔（別題『護法滅親』）（陝西）北路梆子（山西）上党梆子（山西）上党落子（山西）大平調（河南）婺劇（浙江）花鼓戲（別題『皇帝斬駙馬』）（安徽）

演目の広がりはおもに河北省・山西省・陝西省を中心とするが、安徽省の花鼓戲、浙江省内陸部で演じられる婺劇にも取り入れられている。上記の劇の種類のうち、河北梆子をはじめとして、豫劇・晋劇・蒲劇・評劇・秦腔などはいわゆる梆子腔諸劇の代表的な劇種であり、婺劇と花鼓戲以外は梆子腔諸劇に属する。梆子腔諸劇は梆子（パンズ）と呼ばれる拍子木と板面胡弓を楽器の中心として用い、音楽に共通性がある。この間での移植はかなり簡単に行えるため、もともと共通の演目も多い。

浙江省の婺劇は、梆子腔諸劇には数えられないが、もともと複数の曲調を用いるうえ、近年でも秦腔などから演目の移植が行われており、『朱元璋斬婿』もそ

の一例として考えることができよう。歌詞から見て、直接許鳳錦の脚本から移植されたものと考えられる。

この中で、取り扱いが難しいのは安徽省の花鼓戲の演目『皇帝斬駙馬』である。花鼓戲に使われる音楽は小曲と呼ばれる民間歌曲から変化したものであり、上記の梆子腔諸劇とは大きく隔たりがある。そのため基本的な劇の流れは共通しており、セリフにも同じものが見られるにも関わらず、歌詞についてはほとんどの部分が書き直されている。同じ作品とはいえないが、同じ系列にある作品であるといえるだろう。また、このように全く別の音楽系統の地方劇に移植されることは、演劇としての筋立てがよくできているという判断の現われと見ることもできよう。

では、『朱元璋斬婿』は、どのような部分が評価されてこれほど多くの地域と劇種に広がっていくことになったのだろうか。まず、この作品の筋立てについて確認しておきたい。河北梆子『朱元璋斬婿』は8場からなり、あらすじは以下の通りである。

『朱元璋斬婿』あらすじ

- 第一場：朱元璋のもとに馬皇后と安慶公主、駙馬の常天亮が姿を見せる。朱元璋は常天亮に巡察の命を授ける。
- 第二場：蒙山県の知県と知府が登場する。常天亮が現れる。知県は蒙山の茶葉の良さを語りながら接待する。酔いが回った常天亮は休む。常天亮の部下の周保は知県に車20輛ぶんの茶葉を申しつける。
- 第三場：車20輛ぶんの茶葉をひとびとから召し上げるために、蒙水の人々は苦しめられる。役人の劉唐はそれを止める決意をする。
- 第四場：蒙水橋に周保が茶葉を積んだ車を連れてやって来る。劉唐はそれを押しとどめる。常天亮は劉唐に止められ、怒って打ちすえる。劉唐は大明律に私茶の罪が明記されていることから直接皇帝に陳情することを考える。
- 第五場：村のむすめ張翠姑は訴状を持って訴え出る。知府をはじめ常天亮を処罰しようとするが、常天亮に自分の行動は皇帝朱元璋の命を受けたものであると言われ、常天亮になびいてしまう。張翠姑は讒言の罪で処刑される。
- 第六場：朱元璋は身分を隠して山神廟に詣で、そこで劉唐が周保に追われているのに出くわす。朱元璋は直接劉唐の訴えを聞き、皇帝直属の秘密警察である錦衣衛の高見賢に蒙山県を調べるように申し付ける。
- 第七場：朱元璋は常天亮を呼び出し、死罪を申しつけるが、馬皇后と公主が

思いとどまらせる。公主と皇后に止められて、朱元璋は死罪に処するという方針を覆してしまう。馬皇后は同時に常天亮の父である常海英を都に呼び戻しさらにとりなしてもらおうとする。

第八場：朱元璋の前に判決の討議のために臣下たちが集まる。朱元璋の密命を受けて調査した官僚高見賢は処刑を主張し、宮中の重鎮である徐達は父親の功績をもって罪一等を減じることを主張するなど結論が出ない。そこに駙馬の父である開国の功臣常海英が辺境防備から都に戻る。常海英は当然息子をかばうかと思われたが、意外にもあくまで法を守り、自らの息子を処刑することを願い出る。朱元璋と常海英は嘆きながらも常天亮を処刑する。節を曲げなかった地方官劉唐は知府に昇進し、帝に手ずから酒をくだされる。

「新編歴史劇」は1940年代からすでにあまり史実から乖離しないこと、という目標が立てられていたものの、『朱元璋斬婿』の筋立ては、必ずしも史実に沿うものではない。

まず、物語の舞台である「蒙山県」は地域をはっきりと書かれてはいないが、四川省にある茶葉の産地である蒙山をモデルにしているものと思われ、チャン族やトゥチャ族という四川の少数民族の名前も劇中に見られる。これは『太祖実録』にこそ関所の位置について「蘭県（現在の甘肅蘭州）」という地名があるが、『明史』にそれが書かれていないところから、茶葉の産地を舞台にしたものだろう。

歴史上の事件が起こったのは洪武30年（1397）という時期であり、その時にはすでに馬皇后はこの世になく、開国功臣の徐達も、皇帝の命を受けて直接調査を行う検校の役職にあった高見賢も世を去っている。事件の中心となる駙馬の名は常天亮と変えられている。また史上の人物ではない駙馬の父親常海英は、開国功臣の一人常遇春をモデルにしていると思われ、じっさい長春市京劇団『朱元璋斬駙馬』や、花鼓戲『皇帝斬駙馬』では「常遇春」の役名で登場するが、常遇春は早く洪武2年（1369）に死去している。

『朱元璋斬婿』の重要な登場人物のうち、この事件のさいに史上に実在する人物は朱元璋と安慶公主、周保（欧陽倫の部下）のみであり、実在するが史上の事件の時点では没後の人物としては馬皇后・徐達（開国の功臣）・高見賢（開国当初の査察官）がおり、史上のモデルのいる人物としては常海英（常遇春、開国の功臣）・常天亮（欧陽倫、駙馬）・劉唐（河橋巡検使）が、架空の人物としては村のむすめ張翠姑がいる。

地方劇の役柄としては朱元璋（生）・常天亮（小生）・常海英（浄）・馬皇后（青衣）・安慶公主（花旦）となっており、それぞれの人物、つまりそれぞれの役

柄の役者に見せ場となる歌唱部分が用意されている。地方劇では役柄が声の高さと歌唱法に対応するため、これは実際の劇団が演ずることを考えた配慮といえるだろう。

『朱元璋斬婿』の「新編歴史劇」としての特徴は、特にその前半において、虐げられた農民の代表として、村の娘張翠姑が自らを犠牲にし、また朱元璋のもとで戦い抜いた老兵であり、今は身分の低い役人にすぎない劉唐が農民に代わって声を上げようと立ち上がるという筋立てに表れている。

しかし後半では、けっきょく皇帝自身が身分を隠して調査することによって事態が明らかになること、また常天亮がなぜこのような事件を起こしてしまったのか、という動機や罪への反省と後悔にはほとんど場面が割かれないうことなど、事件を原因から解決するには至っていない。

ただし、『朱元璋斬婿』の後半が劇評において論じられるさいに、これらの「新編歴史劇」としての欠点と考えられるような部分が、批判的な文脈で取り上げられてはいるわけではない。むしろ結末にかけての筋立ての評価は高い。

『朱元璋斬婿』は、上演を経て1981年から1982年にかけて数本の劇評を得た。それらにおいて評価されている点の第一には、劇の「思想性」、とくに皇帝と「守法」の関係を挙げることができる。

林涵表「歴史の足跡を訪ねる—歴史劇に関する談話三則 一、新編「歴史裁判劇」についての若干の問題を語る」(部分)

この劇では朱元璋をたたえ、法を執行しておもねらない「清廉な官僚」劉唐と、「大明の法律」をもたたえ、「法規を正しくしたことを万民が讃える」。これはある種の伝統的な「裁判劇」と比べれば、思想性は大いに「向上」しているといえるだろう<sup>(15)</sup>。

劉乃崇「法規を正し、万民が讃える —新編歴史劇『朱元璋斬婿』を観て—」(部分)

新しく制作された歴史物語劇『朱元璋斬婿』は、作者許鳳錦が『明史』列伝第九「公主伝」の安慶公主と駙馬欧陽倫の材料をもとに敷衍して作ったものである。この劇が強調するのは、法規が厳しくあってこそ、人々が幸せに暮らし社稷が安定するという中心的思想であり、今日上演することには大きな意義がある<sup>(16)</sup>。

これらは文化大革命後の時期において、「守法」を強調した主題を扱うことに対しての評価であるといえよう。それに対してその主題がどのように表現されて

いるか、という点については、特に第八場と、そこに登場する常海英に対する高い評価が見られる。

王国強「天網恢恢情けを容れず—新編歴史劇『朱元璋斬婿』を談ず」（部分）  
取り上げるに値するのは、この常海英という人物である。作者は多くの筆を費やしてはおらず、全劇のうち、彼には一場面での登場と、二曲の歌しか与えてはいないが、その人物形象は十分に突出したものがある。作者は虚実を織り交ぜ、虚をもって実に変えるという方法を用いてこの人物を作り上げている<sup>(17)</sup>。

王昌言「燕山の足元に新たなつぼみが開く—河北梆子『朱元璋斬婿』を観て」（部分）

朱元璋は大いに感動し、常一家の功績を思い、また常海英がかくも年ふりながらも、なお国事を重んじ、私情を挟まないことに憐憫を生じて、赦免しようとする。しかし最後には常海英の意思が固いことから、ついに常天亮を処刑する。この場面が劇全体の最高潮であり、変化と起伏に富んで情趣にあふれ、観衆をしっかりつつかんで放さず、場を離れることなどまったくできない<sup>(18)</sup>。

新編歴史劇として史実に沿いながら作劇されたはずの『朱元璋斬婿』において、目立って評価されているのが架空の人物であり、それが登場する場面であることは着目する必要があるだろう。

## 5. 『朱元璋斬婿』第八場「殿斬（宮中での処刑）」から

地方劇の演目のうち、特に著名な場面や劇的な展開を見せる部分は前後から切り離されて演じられることがあり、それを「折子戲」と呼ぶ。さらに折子戲になる場面の中の歌唱部分が独立し、舞台衣装をまとわずにそれだけを歌う「清唱」として舞台上げられることがある。

『朱元璋斬婿』についていえば、第八場「殿斬」における常海英と朱元璋の歌がそれに当たる。この場面では、歴史上の事件の中心人物であるはずの皇帝の娘婿常天亮は、もはや運命を実の父親常海英と妻の父親である皇帝朱元璋に委ねるしかない。そして辺境の戦場から急ぎ都に戻った実の父親常海英が、いかにして皇帝朱元璋を説得するのか、という方向にいったん観客は導かれるが、展開は全く逆になり、常海英は朱元璋に法律の厳格な適用、つまり息子の処刑を願い出

る。朱元璋はそれを受け入れ、苦渋の決断を下すのである。やや長いが、以下に常海英と朱元璋が代わる代わるに歌う場面を原文とともに訳出する。

斬駙馬 脚本 第八場「殿斬」（部分、原文については原書に従い簡体字を用いた）

常海英 儿啊！（手缕着常天亮的发辮子唱） 息子よ！（手で常天亮の髪の房をつかんで歌う）  
 老一辈满身上刀伤血痕， この老いぼれは満身に刀傷を負いながら、  
 打下江山定乾坤。 国土をうちたて天下を定めた。  
 老将们年过五旬白双鬓， 老将たちは年五十歳をすぎ髪も白くなり、  
 好似夕阳近黄昏。 あたかも夕日かたそがれのごとし。  
 实指望黄河后浪推前浪， ひたすらに望むは、黄河の波が後から前を押し流し、  
 一代新人换旧人。 新たな世代が前の世代に代わること。  
 钦命出巡负重任， 勅命を奉じ査察の大任を負いながら、  
 擅权枉法害黎民。 権柄をかさに着て法を曲げ、民草をそこねるとは。  
 越思越想心越恨， 思えばおもうほど心のうちにつる無念さ、  
 求万岁将奴才他……（挥泪） 陛下、なにとぞこやつを……（涙をぬぐう）  
 立斩午门！ 午門に引き据え、ただちに処刑してください！

朱元璋 （大受触动，唱）老爱卿啊！ （大いに感じ入り）卿よ、  
 老爱卿守法纪王心受动， 卿の法を守らんとするふるまいに、感じ入ったぞ、  
 （亲切地下位搀起） （自ら玉座を下りて助け起こす）  
 老皇兄莫跪且把身平。 どうか兄上、跪くなどせずお直りください、  
 斩駙馬卿可知王心苦痛， 駙馬を斬るには、わが心も痛んでいたことはござんじのはず、  
 怎奈是法如天令出必行。 いかんせん法は天の如く、必ず執行せねばならぬ。  
 （指常天亮） （常天亮を指さし）  
 他夫妻虽然不到老， かれら夫婦は偕老同穴の誓いもいまだ、  
 咱君臣依然是亲翁。 我は君主、そちは臣下とはいえやはり彼らの実の父。  
 卿护法不护亲生子， そちが法を守って己が子をかばわぬというからは、  
 王对卿封上再加封。 そちにさらに加封しようぞ、  
 王封你不参王来不辞驾， 我に目通るにも拝礼はいらぬ、  
 信步出入九龙庭。 思うがままに宮中に入入りせよ。  
 王封你万人之上一人下， そちを万人の上、帝ひとりの下におくゆえ、  
 带管着满朝文武卿。 朝廷全ての文武の臣を従えよ。  
 单等亲翁百年后， そちが百年の後に世を去るときは、  
 王率领满朝文武、三宫六院、 文武の臣に后妃や宮女たちを率い、  
 头戴麻冠、身穿重孝、 麻の冠に白の喪服をまとい、

	一步一步送卿到坟莹。	ひとあしひとあし墓所に送ろうぞ。
	(常感动地双膝跪倒、朱急搀。)	(常海英は感じ入って跪き、朱元璋が体を支える)
	檀香木刻卿像宗庙供俵，	白檀の香木に像を刻んで廟に祀り、
	逢年节满朝中举哀祭灵。	時節が来れば朝廷あげてとむらおう。
常海英	折煞为臣了！(打躬)	過分の仰せでございます！(礼を取る)
朱元璋	(接唱)扭回头，叫众卿，	(続けて歌う)頭をめぐらし、みなを呼ぶ、
	站立两旁侧耳听，	左右に立ってしかと聞け、
	(众垂首伶听。)	(皆、頭を垂れて聞く)
	哪一个以权越法害百姓，	何者であれ、権勢づくで法を破り民を害するものは、
	天网恢恢不容情，	天網恢恢、情けをいれるなかれ、
	(众低头作揖)臣等不敢！	(皆、頭を下げて拝礼)我ら決していたしませぬ。
朱元璋	御林军！	衛兵！
御林军	有！	ははっ！
朱元璋	(痛苦地)将驸马推出午门……(颤抖)	(苦しみ)駙馬を午門に引き出し……(震えて)
常海英	(挥泪)斩！	(涙をぬぐい)斬れ！
朱元璋	(悲痛欲绝，挥泪)斩！	(悲痛に氣を失いそうになりつつ涙をぬぐい)斬れ！

常海英は開国の功臣であり、朱元璋の臣下として戦い続けて明朝の建国に力を尽くしたことになる。史実では明朝の建国30年というこの事件の時期には、主たる臣下たちはあるいは肅清にあい、あるいは自ら叛乱に加担して処刑されている。前述の通り、常海英のモデルである常遇春が早く没していることも含めて、開国の功臣たちが居並び「老将たちは年五十歳をすぎ髪も白くなり、あたかも夕日かたそがれのごとし」といえるような状況はないのである。

この部分は舞台の時代と同時に、『朱元璋斬婿』が作られた1979年を念頭に置いているように思われる。1979年は中華人民共和国の建国30年にあたる。人民共和國建国時の「開国の功臣」たちの命運も重なって見えたところもあったろうし、「ひたすらに望むは、黄河の波が後から前を押し流し、新たな世代が前の世代に代わること」という常海英の歌には、当時の観衆が共感できるところも多かったのではないだろうか。

父親の苦勞があつて地位を手に入れたにも関わらず息子常天亮は「勅命を奉じ査察の大任を負いながら、権柄をかさに着て法を曲げ」る。そして常海英は父としての私情を捨て「立斬午門」の四字をもって皇帝に守法を促す。まさしく呉晗が述べた「君主がもし法を守らなければ、政治はただちに常軌を逸し、臣下は基準とするところを失くし、亡国の禍がほどなく訪れることになる」という言葉を、劇中に体現して皇帝につきつける役目を果しているといえよう。そこで朱元

璋も、劇中に何度も繰り返される守法の重要さに立ち戻り「いかんせん法は天の如く、かならず執行せねばならぬ」と決断を下すことができる。

『朱元璋斬婿』は、架空の人物である常海英という人物によって、古典の歴史劇に見られるような物語の筋立てを作り上げ、二人の父親が下す苦渋の決断からくるカタルシスを観客に与えている。また現代の新作として時宜にかなった「守法」という明確な主題を打ち出し、皇帝自身や功臣、姻戚といった人々でさえも法には従わなければならない、というメッセージを伝えることでクライマックスを演出しているといえる。

## 6. 増加する「朱元璋斬婿」の演劇

1980年代以降、『朱元璋斬婿』が他の地方劇に移植されていく過程とともに、朱元璋について書かれた論文、伝記、歴史読み物の類には多くこの話柄が載せられたことは先に述べた。陳梧桐『洪武皇帝大伝』（1983年）などはその代表といえるだろう。さらに、1990年代以降は茶文化関連の書籍にも見えるようになり、『中国茶典』（1995年）、『中国文化雑説 茶酒文化巻』（1997年）、『名茶掌故』（2004年）など、とくに明代の茶文化について述べるときには必ずといってよいほどふれられる記事になっていった。これらも「朱元璋斬婿」の物語を定着させるのに影響力があったと考えられる。

このような状況のもとで、『朱元璋斬婿』という特定の演目の影響を離れて、同じ事件を下敷きにした別の演目が作られるようになった。そのため、以下の作品は人名などもより歴史的事件に沿ったものとなっている。

江蘇省揚州の地方劇である揚劇の演目として、1988年に『鉄頭巡検』という作品が作られている。『鉄頭巡検』の活字本には刊行年次の記載がないが<sup>(19)</sup>、『1988年刊物発表劇本目録』に記載があり、これに従えば1988年刊行ということになる<sup>(20)</sup>。この作品の中では駙馬の名を史書の通り「欧陽倫」とする。欧陽倫を阻む巡検の名前は「張歩」とされ、劇の冒頭では朱元璋の馬回り役「馬官」を務めており、学もないこの「鉄頭」（日本語でいう「石頭」の意）の男が、臆さず欧陽倫の罪を糾弾する。張歩の妻宋春姑も重要な登場人物である。登場人物の対立の軸は安慶公主の姉である寧国公主が妹とその夫をかばうが、朱元璋はあくまで駙馬を処刑する、というものとなっている。

なお、揚劇には同じ物語の別の演目もあり、そちらは『斬駙馬』と題される。『朱元璋斬婿』の別名と題名は同じだが、年代も不明な写本の『斬駙馬』によれば、演目としては別のものである<sup>(21)</sup>。この揚劇『斬駙馬』は駙馬の名前を「林伏天」とし、周保にあたる役を「李保」とし、林伏天の父親役は登場しない。登

場人物の対立の軸は、劇中では馬皇后が存命で、娘婿である林伏天を情のもとに救おうとするが、朱元璋は守法を貫き処刑する、という筋立てになっている。

上記の二者は、揚劇として演じられたことは記録によってたどれるものの、当時どのような位置づけの劇であったかは現在のところわからない。それに対して、1991年に秦腔の新編歴史劇として制作された『社稷情』は、当時の状況にあるていど跡付けられる。

郝昭慶（1940-）は陝西省漢中市歌舞劇団で脚本を担当し、1991年に秦腔新編歴史劇『社稷情』を創作した<sup>(22)</sup>。この作品によって陝西省新演目上演賞、優秀創作賞などを受賞し、中央文化部の招きで北京での上演も果したという。脚本は雑誌『劇本』1991年9月号に掲載された<sup>(23)</sup>。

### 『社稷情』あらすじ

第一場：周保は堂々と車50輦の茶葉を運んで褒河の駅を通ろうとする。耿介は同知からの手紙を見ても動じずに捕えようとするが、駙馬に皇帝から与えられた全権委任の腰牌を見てひるむ。耿介はひそかに腰牌の型を取り、訴える準備をする。

第二場：鄧文鏗は茶葉密輸の調査の任務を帯びて褒河の駅を訪れる。鄧文鏗は役目を果さず見逃した耿介を棒打ちの刑に処す。耿介は周保の所業を訴える。鄧文鏗はちゅうちよするが、妻に激しく難じられて思い直す。

第三場：欧陽倫と公主は周保の報告を聞く。鄧文鏗が訴えを起こすことを聞き、欧陽倫は周保を毒殺して証拠隠滅を図る。

第四場：公主は鄧文鏗の妻と渡りをつけようとする。鄧文鏗は耿介に、直接大理寺に訴えさせようとするが、越権行為として邪険に打ち据えられる。鄧文鏗の妻は恐れる鄧文鏗をはげまし、みずから髪を切って誓いを立てる。

第五場：鄧文鏗と耿介は病床の朱元璋に欧陽倫の悪事を訴える。耿介は朱元璋に讃えられて昇進を約束される。公主が朱元璋のもとに現れる。ここから公主・朱元璋・耿介の歌唱が続く。その場に残った朱元璋と鄧文鏗は言葉を交わし、最後の判断は朱元璋に委ねられる。

第六場：朝議の場で、鄧文鏗はあらためて欧陽倫の悪事を訴える。欧陽倫はしらを切るが、証拠を突きつけられて引き据えられる。大臣たちは適切な処罰を示すことができず、朱元璋も苦しむ。朱元璋は亡くなった馬皇后の幻に導かれて、決断を下す。朱元璋は自ら守法の重さを説き、欧陽倫を処刑する。耿介は昇進する。安慶公主は自殺しよう

とするが、朱元璋はそれをとどめ、公主の位を剥奪し庶民とする。

劇自体の内容の特徴としては、舞台の場所を『太祖実録』にもある通りの「蘭県」ではなく「陝西漢中褒河駅」という実在の地名にしていることが挙げられる。これは作者郝昭慶が勤めていた場所をそのまま使ったものであろう。駙馬欧陽倫の罪は、茶葉の密輸に加えて、配下の周保を殺害し真相の隠蔽を図ったことになっている。

この作品は劇中人物の衝突の軸を朱元璋の「守法」と安慶公主の「情」の対立に求めているが、欧陽倫が周保に罪を着せて毒殺していることから、同情の余地がない。また耿介の毅然たる態度や、鄧文鏗が妻に励まされて筋を通そうとするなど、権力に屈しない役人たちが前半を牽引し、朱元璋は最後の判断を委ねられるにすぎないため、朱元璋の懊悩もあまり大きなものを感じられない。また歌唱部分が地方劇としてはかなり少なく、劇の最高潮がじゅうぶんに高まるとは思われないなど、欠点が多いように思われる。

その後、「古裝小戲」と題された王建平『斬駙馬』が2002年に雑誌『戯文』に掲載されている<sup>(24)</sup>。しかしこれについては地方劇の形式を持つてはいるが、どの地方のものか分からず、また解説や評論も伴わない。内容は短く、人物も橋吏の李樹義のほかは朱元璋と安慶公主、欧陽倫と周保という最低限の人物のみで進むものになっている。

上演にさいしてもある程度話題になり、劇の創作に関する資料もある作品には、2009年、姚曉群（1967-）によって福建の莆仙戯の脚本として書かれた『天子与嬌客（天子と娘婿）』がある。題名は、おそらく1997年に発表された「朱元璋斬婿」の話柄を題材とした完顔海瑞著の歴史小説『天子嬌客』から借りたものと思われるが、架空の登場人物や劇中の物語の展開がそれと重なるわけではない<sup>(25)</sup>。

『天子与嬌客』は『福建芸術』2010年6月号に、上演後の完成台本が掲載されている<sup>(26)</sup>。莆仙戯は、福建省莆田市を中心に演じられる地方劇である。梆子腔諸劇とは関連がないこともあり、『朱元璋斬婿』はもともと移植されておらず、おそらく当地では初めて作られたこの物語の演目であると考えられる。

舞台の場所は「陝西蘭州安県」とされており、『太祖実録』に載る「蘭県」に合わせている。

#### 『天子与嬌客』あらすじ

序 幕：朱元璋は鄧文鏗の建言を入れて、茶葉の密輸を取り締まることにする。欧陽倫はその役に自ら名乗り出る。

第一場：欧陽倫は厳しく茶葉の密輸を取り締まることを述べたあと、姚知県

に60輻の車を準備するよう命令する。

第二場：周保は関を通ろうとするが、鄭光厳に止められる。鄭光厳は荷物を改め、その多くが密輸の茶葉であることを知る。鄭光厳は殺されかけるが、姚知県と麗娘に発見されて一命を取り留め、訴え出ることを決める。

第三場：欧陽倫は自らの功績を誇る。公主と朱元璋もそれを喜ぶ。鄧文鏗は鄭光厳からの訴えを奏上する。

第四場：欧陽倫は周保に自分の罪を全てかぶることを承知させる。鄧文鏗は捜査の上で周保が重要であると目をつけ、探索させる。

第五場：周保は欧陽倫の罪を全てかぶせられた上で暗殺される。麗娘も巻き添えとなる。麗娘がいまわのきわに教え、鄭光厳は周保の秘密の書類の隠し場所を知る。鄭光厳は鄧文鏗に書類をとどけて訴える。

第六場：朱元璋は馬皇后の夢を見る。朱元璋は周保が殺されたことを知る。

第七場：欧陽倫は罪があばかれることを覚悟するが、なんとか救われる手だてがないか考える。

第八場：鄧文鏗は証拠の書類を持って朱元璋に訴える。朱元璋は怒り、公主のとりなしもむなしく欧陽倫は死罪に処される。

作者の姚曉群は自らが基づいた史上の事件を分析しているが、そのさいやはり先行の作品については述べない<sup>(27)</sup>。しかし、すでに確認してきたようにこの劇には2009年の時点で非常に多くの先行作品がある。また、この作品の中では、たとえば『朱元璋斬婿』では等閑視されていた、朱元璋の駙馬に対する処分がどのような判断に基づくものであったのか、欧陽倫がなぜ汚職に走ったのか、など登場人物の行動の動機が考えられている。

欧陽倫は茶葉の密輸を取り締まる立場にあって功績も上げるが、その手口を知り、巨大な利益の誘惑に勝てず自ら手を染める。朱元璋は苦悩しつつも欧陽倫が周保を殺して罪を逃れようとしたことに失望し、国家に損害を与えた罪は叛逆の罪にも等しく、皇族といえども処断する、と処刑を宣告する。これらは先行作の分析の上に立った創作とも思われるが、それらは批判の対象としても、乗り越えられるべき作品としても触れられていない。

「朱元璋斬婿」の物語は、これだけ何度も異なる作者によって演劇化されてきたが、作者と作者を取り巻く人々の言説においては、物語の出所はつねに歴史書そのもののみが示され、先行の作品にも、それを取り上げた歴史研究書にもふれられない。さらに後発の作品を批評する人々も、同じ物語から作られた先行の地方劇の作品について具体的にふれないのである。

それは、本論に述べてきたような過程を必ずしも意図的に無視しているのではないだろう。さまざまな書籍に取り上げられ、また先行の歴史劇の作品によって演じられることで「朱元璋斬婿」の話柄が「伝統的」なものになっていることを前提として、あえて出所を明らかにする必要のない「伝統的な物語」から創作しているという意識を持っているためではないだろうか。

## 7. 「朱元璋斬婿」の現状

中国では1990年代以降、大型の歴史物のテレビドラマが間断なく作られ、朱元璋の物語も何度もドラマ化されている。1993年の『朱元璋』では「朱元璋斬婿」の事件はまだ取り上げられていないが、おそらく現在までにもっともよく知られている、俳優胡軍が朱元璋を演じた2004年の『朱元璋』では、数話にわたってこの話が展開する。第38話では命乞いをする欧陽倫に対して、朱元璋は死罪を免じる代わりに自決を言い渡す。それ以降、『皇后駕到』（2006年）、『洪武大案』（2010年）ではいずれも、「朱元璋斬婿」は宮中をゆるがす大事件として取り上げられている。

「朱元璋斬婿」の物語は現在、歴史読み物、地方劇とテレビドラマに共通する、朱元璋の晩年にかかせないエピソードとして知られていると言えるだろう。今のところ最も新しい地方劇の作品である『天子与嬌客』が2009年に作られたさいには、すでにこのような状況が形作られていたのである。おそらく、今後も朱元璋の物語が各種のメディアに取り上げられ、それが晩年までを描くものになるならば、「朱元璋斬婿」の物語は取り上げられ続けるものと考えられる。

それを裏付けるように、2010年代以降の状況を見ると、『朱元璋斬婿』がかなり盛んに各地方で上演されていることが確認できる。その中には省立や市立の劇団による上演も、民間の劇団による上演も含まれている。

2012年 3月14日	婺劇 勇来婺劇団『朱元璋斬婿』永康市下山門村
2013年 1月28日	河北梆子 石家庄市河北梆子劇団『朱元璋斬婿』
2013年 2月15日	大平調 河南省滑県大平調劇団『朱元璋斬婿』磁県
2015年11月21日	河北梆子 保定市新華河北梆子劇団『朱元璋斬婿』
2015年 1月21日	越調 河北省越調劇団「大型新編歴史劇」『大明朱元璋』 河北省人民会堂
2016年 7月 9日	上党落子 潞城紅旗劇団「優秀伝統劇目」『朱元璋斬婿』 梅蘭芳大劇院

しかもそのさい、新作の演目であるにも関わらず「伝統」の名が冠せられ始めている。これは「新編歴史劇」の演目として作られた作品ではあるが、上演に携わる劇団の俳優や演出の世代交代により、劇団の内部で受け継がれる「経典劇目」・「伝統劇目」として扱われるようになってきていることを示している。また、現在の習近平政権のもとでの「反腐敗」のキャンペーンにもかかなう内容であり、公的な場所での上演にふさわしい演目といえる。特権的な立場を利用した腐敗が根絶されない限り続くのだとすれば、やはりこの劇の上演はまだ回数を増やしていくことになるだろう。

## 8. おわりに

一つの地方劇から始まった新編歴史劇の演目が、全国的な催しで披露され、別の地方劇に移植されることによって、もとの劇種が行われる地域を越えて広がっていく。また、歴史読み物やその演目の題材に関わる分野の書籍において「歴史的事件」として取り扱われることが多くなることで、文化圏の異なる距離の離れた別の地方で同じ話柄をもとにした新たな演目の生産を促していく。

「朱元璋斬婿」の物語についていえば、河北梆子の演目として作られて以降、1980年代にかけて他の劇種にも演目が移植されていき、前近代の法律や茶に関する書籍にさかんに取り上げられた。1990年代には新たに別の劇種で作られるようになり、さらに2000年代にはドラマに欠かせない逸話となった。そして、現在は上記のすべてが並行したうえで、ふたたび「伝統的」な演目として上演されるようになっている。こうした動きが全体として、「朱元璋斬婿」の物語を朱元璋のさまざまな逸話の中でもよく知られたものとして定着させてきたのである。

さまざまなメディアを通じて一つの話柄が広がり、中国語圏の中で垣根なく定着していく様相は一見すれば非常に「現代的」なものに映る。しかし一方でそれは前近代の中国において歴史物語が歴史書と小説・演劇・芸能の間を往還し変化しながら定着していった様相にも通じるといえる。

歴史を題材に取り、すでに過去のものとなったはずの事件とそこに現れる人物を、「われわれの物語」としてとらえ、新たにあるいは文字に起こしあるいは上演し、また映像にする行為は洋の東西を問わず行われ続けている。現在の中国において歴史を題材にした物語が広められていくさいに、現代的なメディアである歴史ドラマや映画が重要な効果を持っていることは世界の他の地域と共通している。

しかしそれらに加えて、地方劇における新編歴史劇が歴史物語を媒介するメディアとして機能していることは注目に値する。本論で取り上げた材料は限定的

なものにすぎないが、ある歴史的事件が地方劇というメディアを通過することによって、「伝統的」に伝えられるものへと変化していく、あるいはその変化が促されるという様相をそこに見て取ることができよう。

\* 本論は早稲田大学多元文化学会第6回大会・総会・春期学生研究発表会におけるシンポジウム「現代文学に見る多元文化性」(2016年7月9日)での報告「現代中国の地方演劇における新編歴史劇—「朱元璋斬婿」の展開から—」をもとに、加筆訂正したものである。

\* 本稿は日本学術振興会科学研究費補助金「明代の史書と歴史文学の相互関係」(平成28～29年度、若手研究(B)、課題番号:16762358)による成果の一部である。

使用テキスト (インターネット上の資料以外はいずれも筆者所蔵)

脚本

- 1 許鳳錦『斬駙馬』創作劇本選輯(新編歴史劇)(徴求意見稿)中国戯劇家協会河北分会 河北省文化局芸術処1981年第2輯
- 2 許鳳錦『斬駙馬』『河北戯劇』1981年第11期収録
- 3 許鳳錦『新編歴史劇 斬駙馬』(取材於明史「公主伝」)北京海淀評劇団 翻印 油印本 出版年代不明
- 4 許鳳錦『歴史京劇 朱元璋斬駙馬』長春市京劇団 1982年8月
- 5 陳肯『新編古装戯 鉄頭巡検(揚劇)』江蘇省揚劇団 出版年代不明
- 6 姚屹・張宝余『揚劇 斬駙馬』江蘇省文化局改編 写本 手写年代不明
- 7 郝昭慶『社稷情』『劇本』1991年9月号収録
- 8 王建平『古装小戯 斬駙馬』『戯文』2002年05期収録
- 9 姚曉群『莆仙戯 天子与嬌客』『福建芸術』2010年6月号収録

映像資料 (部分、インターネット上の資料はいずれも2016年12月に確認)

- 『明君朱元璋』(VCD) 河南戯曲集錦 豫劇 偃師市豫劇団 北京市青少年音像出版社 発行年代不明
- 『朱元璋斬婿』(VCD) 秦腔歴史劇「護法滅親」秦腔 涇陽劇団 西安電影制片廠録音 録像出版社 発行年代不明
- 「晋劇《朱元璋斬婿》上」[http://v.youku.com/v\\_show/id\\_XNjc5MDkzNDA=.html](http://v.youku.com/v_show/id_XNjc5MDkzNDA=.html)
- 「【北路梆子】《朱元璋斬婿》選段」[http://v.youku.com/v\\_show/id\\_XMzAwNjUyNjg4.html](http://v.youku.com/v_show/id_XMzAwNjUyNjg4.html)
- 「越調《大明朱元璋》全場録像 申小梅」[http://v.youku.com/v\\_show/id\\_XMTI3MDAwODMyMA=.html](http://v.youku.com/v_show/id_XMTI3MDAwODMyMA=.html)
- 「秦劇《朱元彰斬婿》之殿斬」[http://v.youku.com/v\\_show/id\\_XOTExOTc4MTk2.html](http://v.youku.com/v_show/id_XOTExOTc4MTk2.html)
- 「河南滑県大平調劇団【朱元璋斬婿】」[http://v.youku.com/v\\_show/id\\_XNTMzMzAwMjUy.html](http://v.youku.com/v_show/id_XNTMzMzAwMjUy.html)
- 「『朱元璋斬婿—老一輩滿身是刀傷血痕』秦腔清唱」[http://v.youku.com/v\\_show/id\\_XNDE4Mjc2NjU2.html](http://v.youku.com/v_show/id_XNDE4Mjc2NjU2.html)

html

「『皇帝斬駙馬』3-1湖南花鼓戲」[http://v.youku.com/v\\_show/id\\_XNDQwNTA5MzY0.html](http://v.youku.com/v_show/id_XNDQwNTA5MzY0.html)

「莆仙戲《天子与嬌客》5-1 莆仙戲劇院2009.12」<http://baidu.ku6.com/watch/06463624459141929305.html>

html

## 注

- (1) 『中国地方戯曲集成』の編集出版の状況については陳仲奇「『中国地方戯曲集成』の編集出版について」『総合政策論叢』23、2012年3月に詳しい。
- (2) 郭啓宏「新編歴史劇の思考」『戯劇報』1986年12期。
- (3) 錢法成「談談新編歴史劇和歷史故事劇的創作」『劇本』1980年第8期。
- (4) 沈祖安「对歴史劇的幾点質疑」『劇本』1982年第5期。
- (5) 『明史』卷121、列伝第九、安慶公主伝。
- (6) 呉哈『歴史的鏡子（増補本）』「歴史上的君権の限制」北京市歴史学会主編『呉哈史学論著選集』第2巻収録、1986年 p488。
- (7) 陳梧桐「評朱元璋整肅吏治的措施」『新華文摘』1979年第12期収録。
- (8) 『廊坊戯曲資料匯編』第3輯、廊坊地区戯劇工作者協会、1985年6月、p47。
- (9) 書誌は使用テキスト脚本1参照。
- (10) 書誌は使用テキスト脚本2参照。
- (11) 書誌は使用テキスト脚本3参照。
- (12) 許鳳錦編劇・劉含真改編『朱元璋斬婿』連環画 農村読物出版社 1983年5月。
- (13) 書誌は使用テキスト脚本4参照。
- (14) 上演年代は不明ながら、上演のさいの配役を記した「戯単」が残っている。
- (15) 林涵表「訪尋歴史的足印—関于歴史劇的随談三則」『劇本』1982年04期。
- (16) 『廊坊戯曲資料匯編』第4輯、廊坊地区戯劇工作者協会、1986年1月、「正法紀万民贊—看新編歴史劇《朱元璋斬婿》」。
- (17) 『廊坊戯曲資料匯編』第4輯「天網恢恢不容情—談新編歴史劇《朱元璋斬婿》」。
- (18) 『廊坊戯曲資料匯編』第4輯「燕山脚下放新蕾—看河北梆子《朱元璋斬婿》」。
- (19) 書誌は使用テキスト脚本5参照。
- (20) 「1988年刊物发表劇本目錄」『中国戯劇年鑑 1989』中国文联出版公司1990、p252。
- (21) 書誌は使用テキスト脚本6参照。
- (22) 惠煥章主編『陝西文化名人大辞典』文物出版社2006年10月、p141。
- (23) 書誌は使用テキスト脚本7参照。
- (24) 書誌は使用テキスト脚本8参照。
- (25) 完顏海瑞『天子嬌客』人民文学出版社 1999年7月。
- (26) 書誌は使用テキスト脚本9参照。
- (27) 姚曉群「走向人物的塑造《天子与嬌客》編劇札記」『福建芸術』2010年6月号。

## New Historical Drama of Local Opera in Modern China: the Development of “Zhu Yuanzhang Executes His Son-in-law”

KAWA Koji

The subject of this study is a work of local opera in China with a story in which Zhu Yuanzhang (朱元璋) executed his son-in-law. This work is classified as a new historical drama. New historical dramas are made under the influence of Marxism.

“Zhu Yuanzhang executes his son-in-law (朱元璋斬婿)” was made in 1979 as a local opera in Hebei Province called Hebei bangzi (河北梆子). After that, it was transplanted to many local operas in the 1980s. And this story has been repeatedly picked up by various media.

“Zhu Yuanzhang executes his son-in-law” brings the audience to a catharsis. Through the appearance of a fictional character Chang Haiying (常海英), the story seems to be like a classic historical drama. In addition, this drama devised a clear theme of “The importance of obeying laws”. The message of this drama is that vassals, relatives of the emperor, and even the emperor himself must obey the law.

In all regions of the world, historical fiction stories have been created. As the story spreads, TV dramas and movies, which are contemporary media, have an important role. This situation is the same in China. But in China, new historical dramas in local opera are also important as a medium to spread historical stories. When a historical incident is dramatized by a local opera, it changes into a traditional historical story.